

ステージマナーについて

ステージマナーというのは「舞台上の立ち居、振る舞い」のことで、単純に言えば「見せ方」と解釈しても良いと思います。

演技・演劇の初心者は、舞台上で演技する際に、この「見せ方」(＝ステージマナー)を知らないことが多いので、ぜひ心得てほしいと思います。

ただ、これから説明することは、あくまでも原則的なことです。演出や演技の都合によっては説明通りにできないこともあります。

そもそも舞台の演技においては、「観客（客席）に背中（お尻）を向けてはいけない」と言われます。

え？ **「お尻を向けるのはお客様に失礼！」**

…いやいや違います（笑）

客席に背中（お尻）を向けた場合の問題点は下記です。

●セリフが奥^{*1}向きになってしまい観客に聞こえにくい

●俳優の表情^{*2}が見えにくい

大まかに言えば以上のような問題点が生まれるのです。

※1:客席に近いところを「前」と言い、「奥」というのは正に舞台の後方を指す。

※2:表情は人間の心の55%を表現するという研究結果がある。

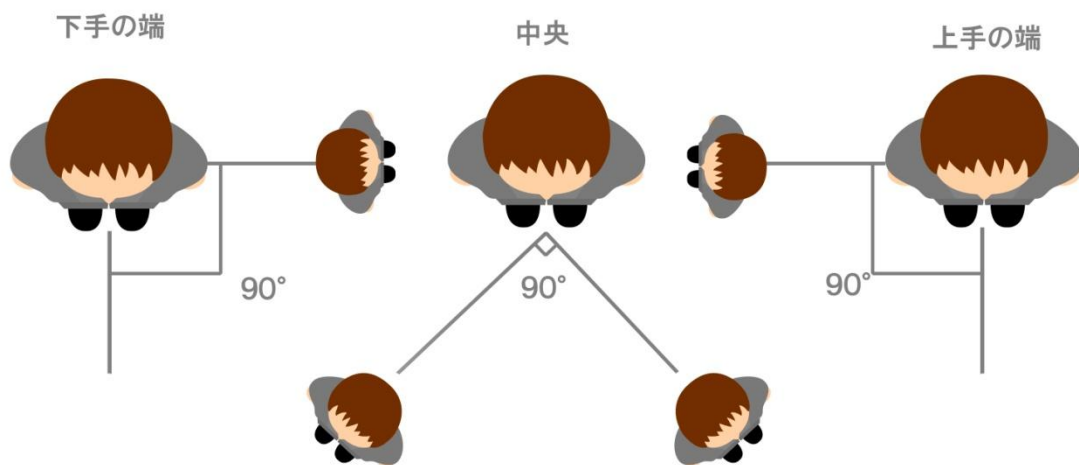
そこで、舞台では「原則として客席に向いて演技をする」ことが求められます。前を向いてセリフを言わないと聞こえにくいし、表情も読み取れないからです。

●立ち位置が下手端の場合、客席に向かって正面から上手に向かって真横の90度の範囲で身体を開くのがベター

身体の開き方！

●立ち位置がセンターの場合、客席に向かって90度の範囲で身体を開くのがベター

●立ち位置が上手端の場合、客席に向かって正面から下手に向かって真横の90度の範囲で身体を開くのがベター

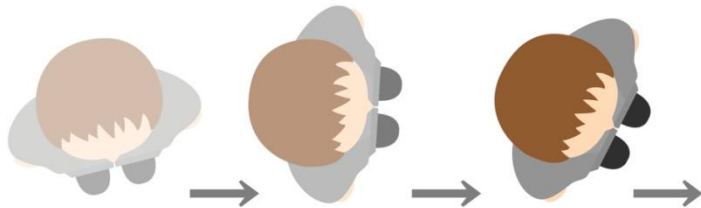


※下手端、上手端ともに、センターに近づくに従って、「立ち位置がセンター」の場合と同様に客席に向かって90度の範囲での身体の開きを意識すると良い。

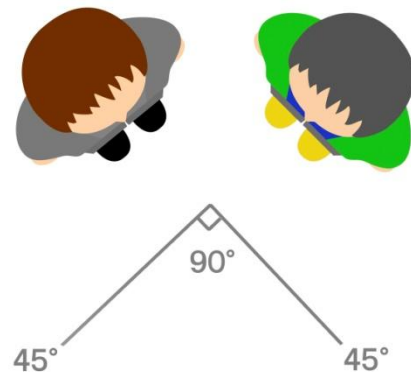
身体の正面を客席側に向けることを「身体を開く」と言います。逆に身体を客席からそむけるのは「(身体を) 閉じる」ということになります。

舞台の端から中央にいる俳優に向かって歩き、二人で向かい合って会話するという場合は次のように振る舞います。

下手端から
中央にいる緑の
演者に移動する



互いに45° に身体を開くと
これで演技上は「向き合っている」形に
なる



演劇で「向き合う」とは？

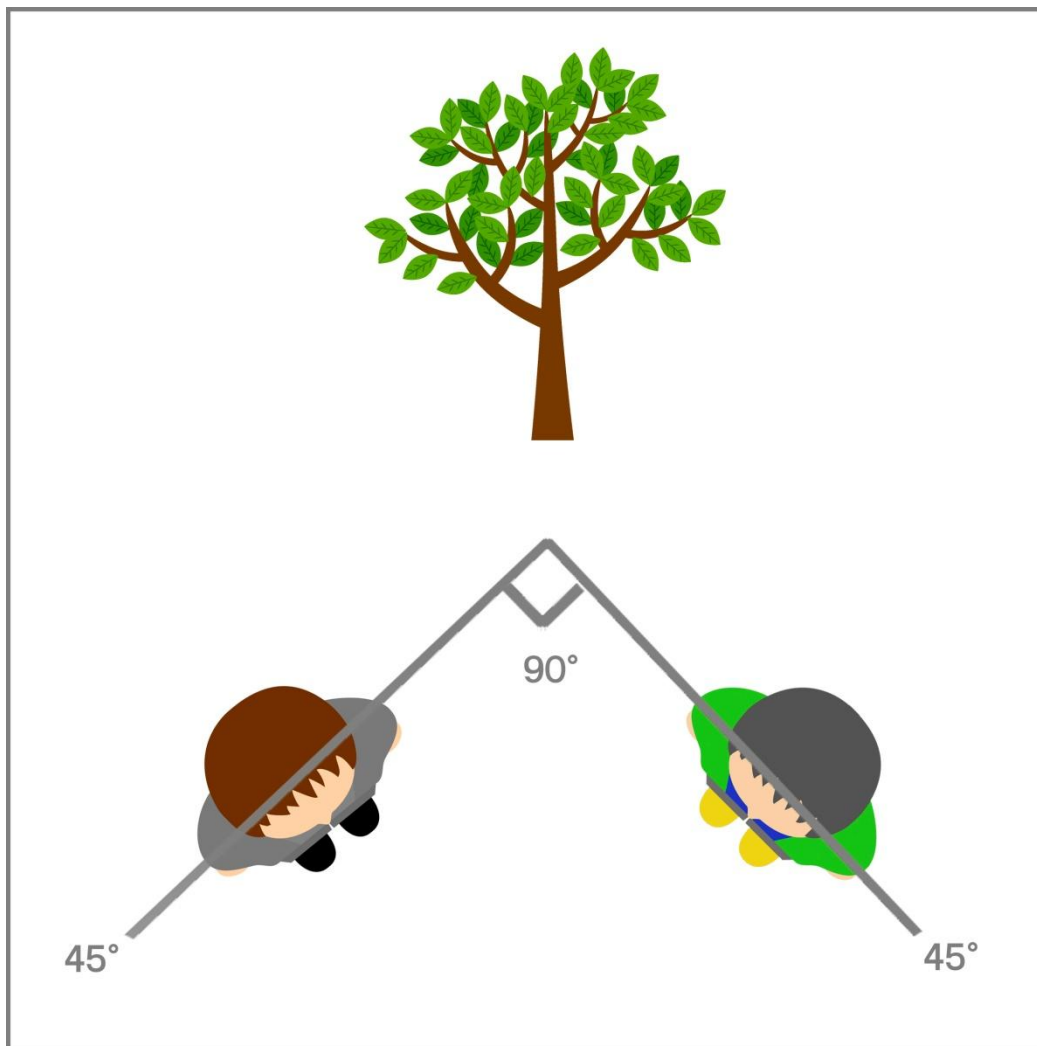
演劇で「向かい合って話す」というときは上の図のように互いに 45° 「身体を開いてセリフを言う」というのが原則です。ちょうど漫才コンビが1本のマイクに向かって話すのと同様だと理解すれば良いでしょう。

しかし、状況によっては「後ろを向かねばならない」ということも演技上で起こってきます。そういう時は、「セリフを言わない時は後ろを向いても良い」「セリフを言わずに済むタイミングを見つけなさい」と私は指導します。

例えば次のような立ち位置にいる場合です。

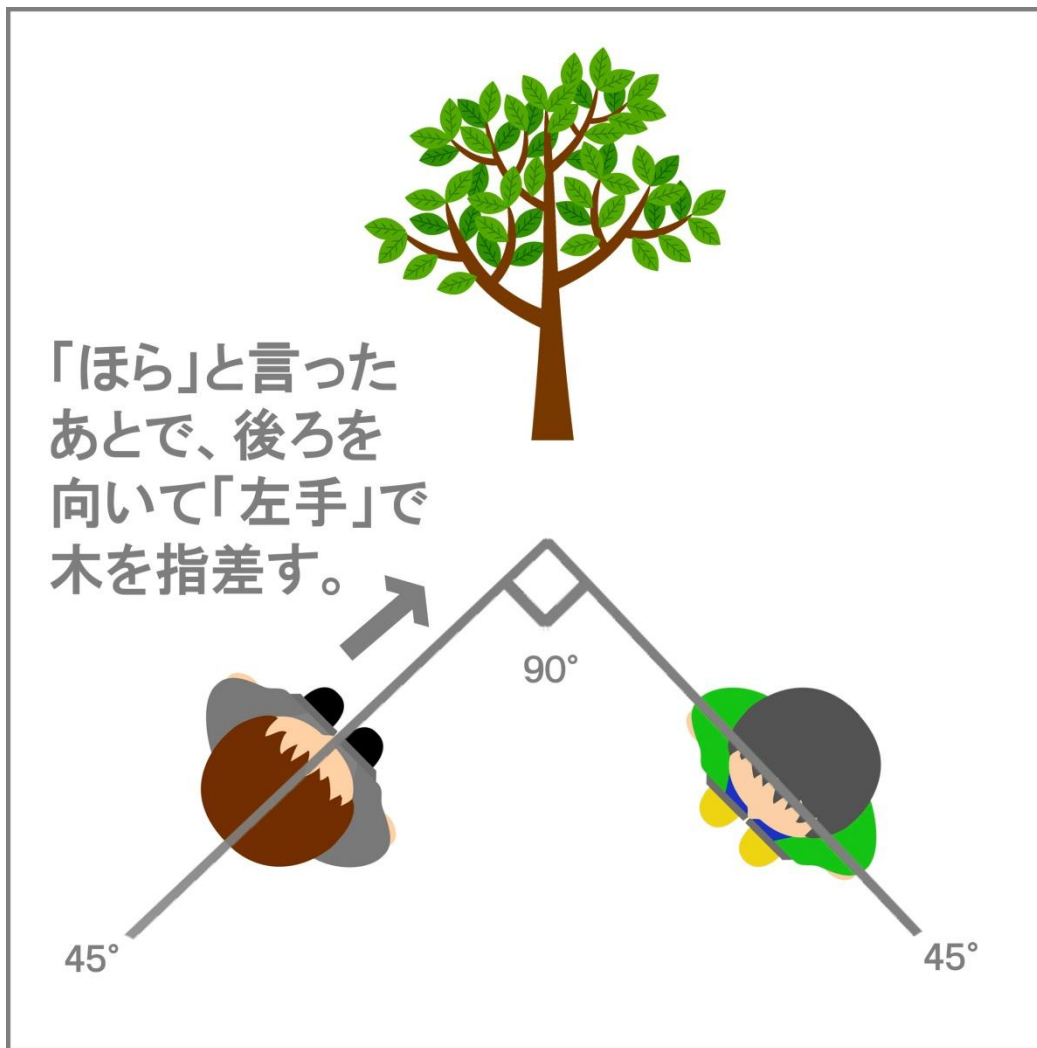
下手さんと上手さんのセリフを下記のようにしておきます。

後ろ向きの芝居っ！



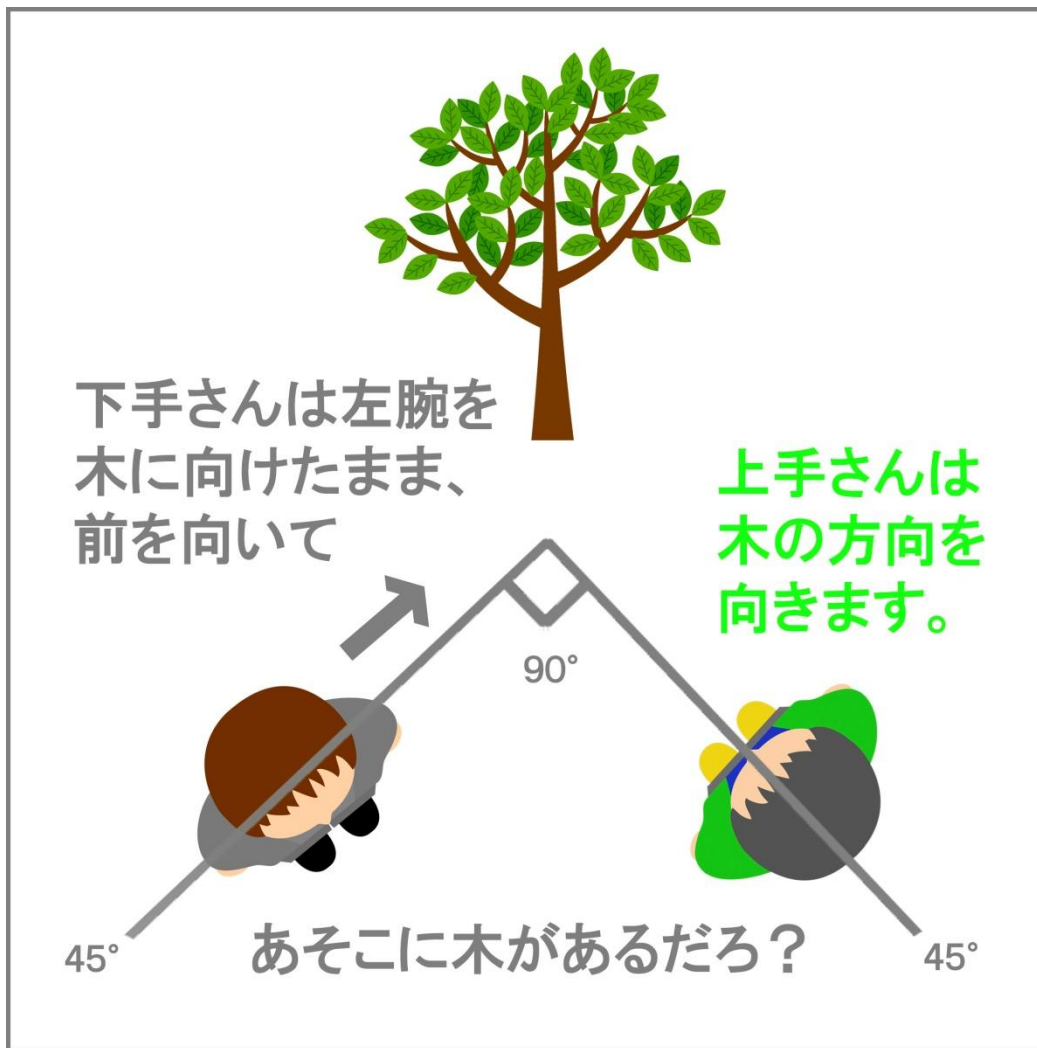
- ①下手 ほら、あそこに木があるだろ？
- ②上手 （見て）ああ、うん。
- ③下手 明日はあそこで待ち合わせな？
- ④上手 わかった！

ではこの二人のセリフのやり取りに段取りをつけてみます。
まず①のセリフを言う時は例えば下記のようにします。



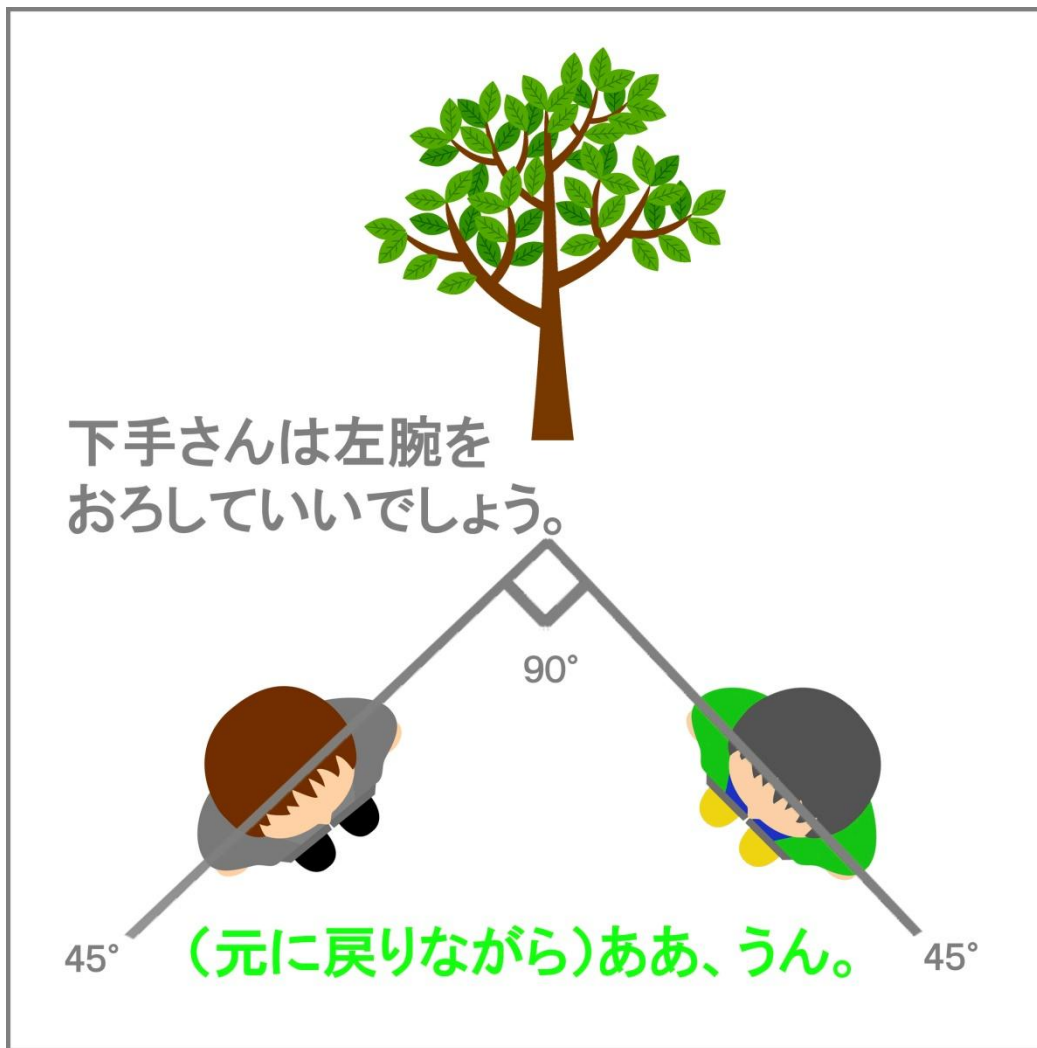
「ほら」は前を向いて言い、すぐに左腕を斜め後方に伸ばして後ろを一瞬見ます。その後、**腕を伸ばしたまま**、すぐに前を向きます。（ごく一瞬の動きですね）

下手さんの腕の動きに反応して上手さんは後ろを向くでしょう。下手さんのセリフの間、上手さんは何も言っていないので、上手さんは後ろを向く事ができるからです。次のような図になります。



「あそこに木があるだろ？」のセリフの間に上手さんは
後ろ向きから身体を元に戻します。

すると二人は次の図のように元の体勢に戻ります。

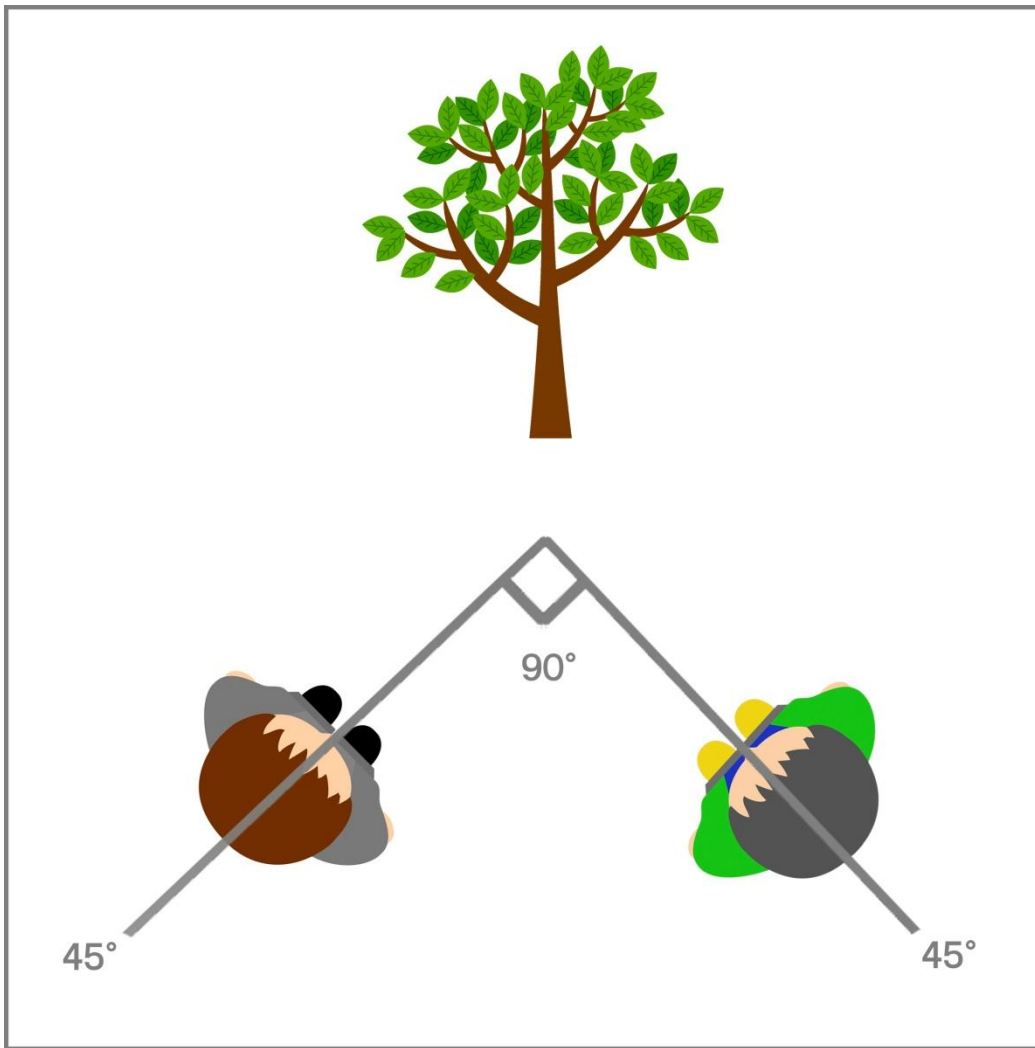


このあと残りのやり取りを前向きでします。

下手 明日はあそこで待ち合わせな？

上手 わかった！

以上のやり取りは例によって45°に身体を開いた状態で交わします。その後、改めて「待ち合わせ場所を確認する」という理由で、二人は無言で後ろを向きます。



以上のように「セリフを言っていない時」に後ろを向く事には問題がありません。ただ、相手のセリフを聴いている時の「表情」に重要性がある場合は後ろ向きになるのが困難な時もあります。

※余談ですが、上手い人は「背中で芝居」をします(笑)

ただ、俳優は「どうすれば前向きで芝居ができるのか」を常に探り、考えないといけないでしょう。

ただ、ひょっとするとこの「向き合う時は互いに 45° 」という原則を実行した場合に、いささか窮屈を感じることもあるかも知れません。それは…

相手の顔をまともに見られない～～！！！！

ということです。正にその通りなのですが、場合によってはもっと両者が身体を開いているケース（つまり両者が作る角度が 90° 以上）もあります。

このような場合は、「視線だけを相手に向ける」ということ、つまり

横目で相手を見る

ということで対処します。

シセン～～！！

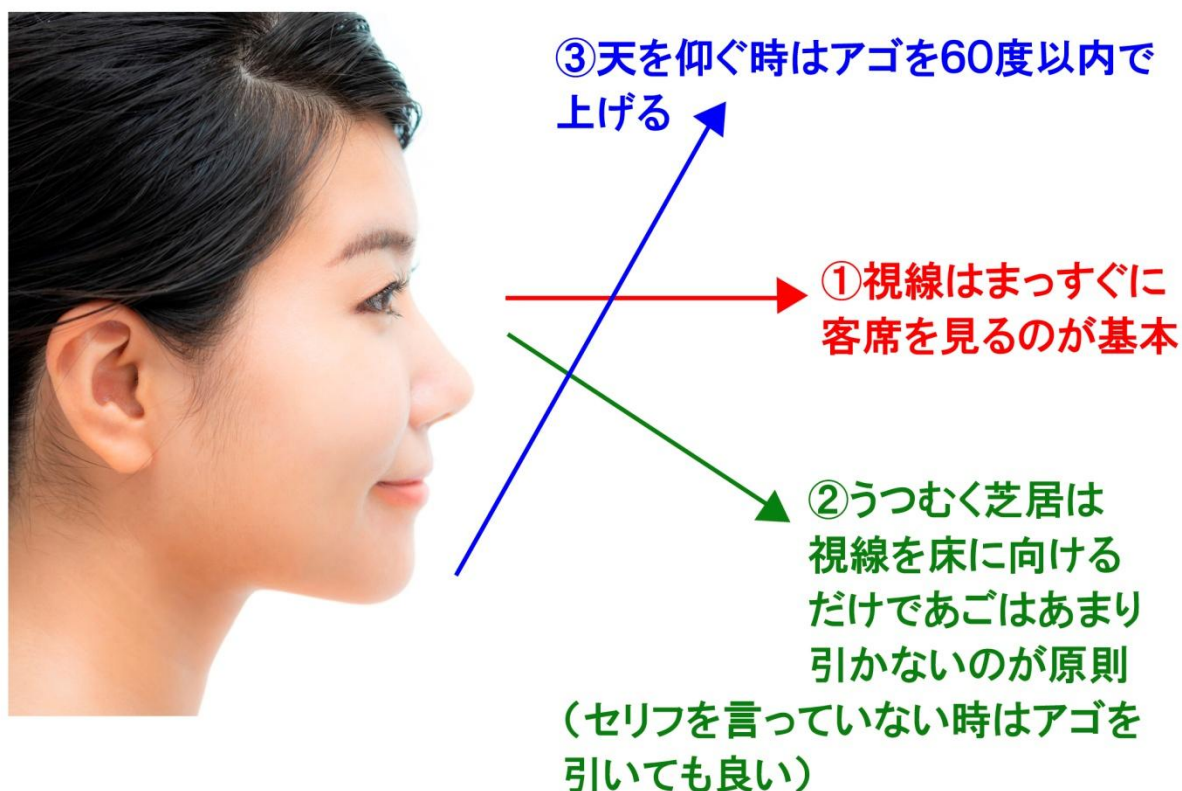
次に、舞台演技では「うつむく」（顔を床に向ける）のは基本のご法度です。

ただし、これも「セリフを言っていない間」はうつむいて

頭頂部を客席に向けても構いません。

原則として下の図のようなステージマナーが必要です。

視線についてっ！



もちろん誰かが分度器を持って測るわけではないので、それほど神経質にならなくていいのですが、「できるだけ顔を上げる」ということを心掛けましょう。

再度申しますが、「うつむく」のも**声が客席に届きにいく、やはり表情が見えにくい**からです。

だから「落ち込んでいる」という演技の場合は、無言の場

合は頭を下げて（うつむいて）もいいのですが、セリフを言う時や、表情を見せないといけない場合は、視線だけを床に向けます。

以上、原則的なステージマナー（立ち居、振る舞い）と視線の使い方を解説しました。

演技では様々な状況が展開されますので、決まり切ったマニュアル的なものではありませんし、演出や装置の都合などによってもなかなか前を向くのが困難な状況もあります。

そんな時は共演者同士で「前を向いて演技しやすいようにするには互いにどう動けば良いか」ということを話し合い、試行錯誤します。それで解決しない時は他の共演者や演出とも相談して、より良い見せ方を工夫するのです。

演技はどこまでも**共同作業**だ、ということですね！

岩鶴恒義